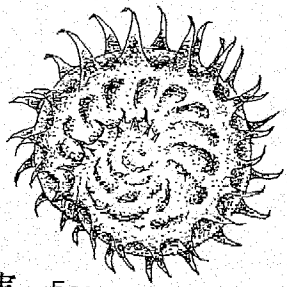
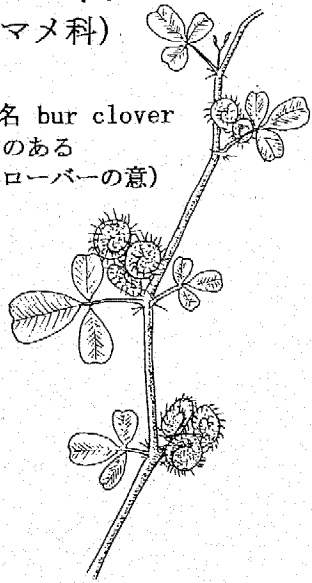


はり ま たん けん 播 磨 探 検

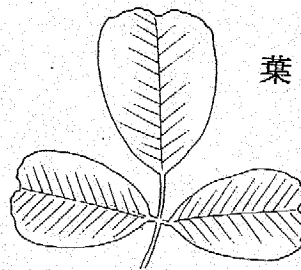
2018.5.29
281号
ふ文赤松弘一

ウマゴヤシ
(マメ科)

英名 bur clover
(棘のある
クローバーの意)



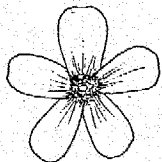
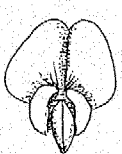
果実 5mm
さやの中に豆が入っている



葉

ウマゴヤシの花

カタバミの花



陽射しは強いが乾いた風が心地よい。5月22日、夏至まであとひと月となったこの日、私は校舎南の畑で土にまみれていた。昨年に続いて今年も食糧確保のために野菜の栽培を企んでいるのだ。すでに山芋とさつまいもは植え付け終わっており、この日、トウモロコシとオクラの種をまいて準備は整った。畑周辺の草を抜いていて面白いものを見つけた。オナモミ（いわゆるひつつき虫）の実のように細かい棘がたくさんついた小さな粒がカタバミの群落の中にたくさん見つかったのだ。直径5mm程のそれはカタバミの実とは全く異なる奇怪な形をしていた。「ひょっとして、これはカタバミに生じた虫こぶではないか？」と推測し、一部を持ち帰って調べてみた。

持ち帰ったものをよく調べると、葉の形がカタバミとは異なることが分かった。カタバミの群落だと思ったのは、実はウマゴヤシの大群落だったのである。

ウマゴヤシはシロツメクサやレンゲソウなどと同じマメ科の植物で、江戸時代にヨーロッパから持ち込まれた外来種である。

ウマゴヤシは「馬肥し」の意味で、馬を肥らせる、すなわち馬などの家畜の飼料とするために持ち込まれたのだが、それが野生化したのである。見つけた棘だらけの奇怪な物体は種子を包む鞘（さや）であり、中に数個の種子（マメ科だから豆ですな）が入っているのだ。

馬肥しというと、頭に浮かぶのは（私だけか？）「火の用心 お千泣かすな 馬肥やせ」という一文である。これは江戸時代の初めに、家康の家臣の本田作左衛門が陣中から妻に送った手紙で、日本一簡潔な手紙として有名である。作左衛門の時代に、すでにウマゴヤシが日本に入ってきたのかはわからないが、馬を肥やすということが重要であったという、当時の生活の様子を教えてくれて面白い。

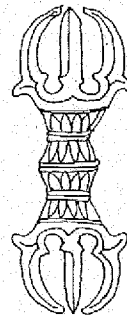
マメ科のシロツメクサと同じように、カタバミもその葉がいわゆる三つ葉のクローバー型なので、てっきりマメ科だと思いこんでいた。しかしカタバミの花を見ると、マメ科の特徴のいわゆる蝶形花ではなく、5枚の花弁がはっきり分かれた形をしている。じつはカタバミはマメ科ではなく、カタバミ科という全くの別種である。花の形の違いを知っていながら、葉の形で惑わされていたのだ。大学の授業で植物学の老教授が「植物の分類は、花を見れば確実である」とノタマわったことを、今さらながら思い出した。ところでカタバミもマメ科のシロツメクサと同じように、四つ葉や五つ葉の変異体があるらしい。

イナバウアーな激臭キノコ発見

サンコタケ

(アカカゴタケ科)

高さ75mm



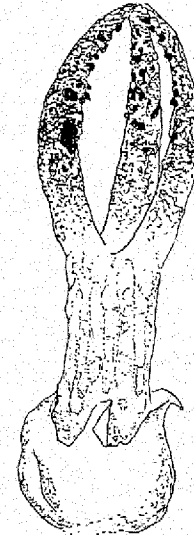
名前のルーツ

三結



初夏から秋に林内に発生する
橙色型と紅色型がある

ツボから出て、腕はもつと伸びる。
本来はこのようになるようだ。(図鑑より)



5月8日の朝、学校の南門の花壇でキノコを見つけた。黒い腐朽材を混ぜ込んだ土の中から1本だけ出ていたのだが、こいつは柄の上に傘が広がるいわゆるキノコ型をしていないので、自然科学に無関心な人はキノコと思わず「これは……何のたたりだ？」と恐れるかもしれないが、これはサンコタケというキノコである。このキノコの仲間にはカニノツメ、アカイカタケなどがあるが、柄の上部が数本に細く分かれた独特の形状をしており、その腕の内側にカニみそのようなペースト状の胞子のかたまり（グレバ）をつけている。そして例外なく極めてアクティブな悪臭を発している。カニノツメは10年ほど前に神戸の総合運動公園で見つけて、「確か臭いはず」と匂いを嗅いだことがある。先端にあるグレバに鼻を近づけると、「うおっ！……やっぱり」とのけぞるような強烈ウンチ臭だった。

今回見つけたサンコタケは特に悪臭が激烈で、生ウンチ+腐敗生ゴミ+下水臭という極めて情け容赦のない匂いであった。こういうキノコの匂いを嗅ぐ場合、恐る恐る鼻を近づけて浅く吸い込むのだが、「たしか臭いはず……まだか……くるか……まだ……ぐえっ〜！」という、激臭スリリング黒ひげ危機一髪型になることが多い。自分だけではもったいないので用務員さんにも体験してもらったが、予想通りの「のけぞりイナバウアー反応」に連帯感を抱いた次第である。

この種のキノコのグレバ（粘液質の胞子）の悪臭は、このようにして楽しむためにあるのではない。キノコはこの匂いでハエなどを呼び寄せてグレバをなめさせ、それを運ばせるのが目的なのである。甘い蜜と香りデョウを呼ぶ美しい花と比較して、「全くえらい違いやな」と我々は思うが、それは人間の感性の問題であり、自然の中では虫を利用した子孫の維持を図る工夫に過ぎず、そこに綺麗も汚いも、香しいも臭いもない。

サンコタケは白い卵のような袋を破って幼菌が出てきて伸びていくが、見つけたキノコにはその袋の一部が赤い腕の先端に付いたままになっていた。残念ながらヤクルト色の柄の基部がナメクジに食われたらしく、大きくえぐれて折れそうになっていた。ナメクジが食べたから無毒だと判断してはいけない。毒キノコにも虫食い痕はよくある。もっともテングダケはこれをなめたハエが死ぬというのでハエトリタケという異名もあるから、虫に対しても有毒な成分があるのだ。イズレニシテモこの極悪激臭のキノコを食うというのはだれも試していないのか、図鑑には「可食」とも「有毒」とも書かれていない。強いて書くなら「無理」ぐらいか。

サンコタケのサンコとは、弘法大師が肖像画の中で手にしている三結という仏教の道具に形が似ていることからついた名前らしい。こんな臭いキノコにその名を冠していいのだろうか。